

「このままではいかん！もお～（盲）っともお～っど備えよう！」

令和6年度 高知県学校安全総合支援事業（災害安全）

高知県教育委員会 拠点校 高知県立盲学校

拠点校の取組

（1）拠点校の目標

- 自分の命を守ることができる児童生徒
- 自分、子どもの命を守る行動がとれる教職員
- 視覚障害のある児童生徒が安心して共生できる地域社会

＜背景・課題＞

○登下校時に発災した場合の状況や安否確認について

公共交通機関を利用した通学、保護者等による送迎での通学、寄宿舎からの徒歩による通学など、本校児童生徒の通学の方法は様々である。特に、単独で通学している児童生徒についての安否確認や、視覚障害のある児童生徒がどのように安全を確保し自分の身を守るかについては、昨年度から引き続いての課題である。

○児童生徒の学習について

教室で緊急地震速報が流れた際に、「机の下で身を守る」、「ダンゴムシのポーズで身を守る」といったことについては、これまでに繰り返し指導し、学習を重ねてきたことにより比較的定着している。しかし、訓練等で経験したことのない状況（廊下や、校内敷地内の外、登下校、トイレの中）下で、同じように行動できるかどうかは、児童生徒の情緒面を含めて不安が残る。

また、防災学習を実施する際には、学部または学習グループなど、児童生徒の実態に合わせるようにしているが、担当学部や担当学習グループ以外の取組や児童生徒の実態については、教職員同士であまり共有できていない。

系統性のある学習を行うために作成した「発達段階体系表」を活用することで、児童生徒の発達段階に合った学習指導を行うことはできるようになりつつある。年度が変わると前年度の学習内容が把握しづらいため、継続的に「発達段階体系表」を活用していかなければならない。

○保護者

昨年度の取組により、保護者の防災に対する意識は向上している。しかし、障害のある子どもの避難、そして避難生活となると、まだまだ不安を感じている保護者も多くいる。

○教職員

危機管理マニュアルなど各マニュアルは、ファイルにまとめ、全教職員に配布しているが、全教職員が内容を把握できているかは不透明である。年度初めに、発災後に活動する各班で担当する業務の確認や発災後に必要な物品の確認、その他必ず周知しておきたいことについて確認を行う「学校安全周知会」を実施しているが、実施方法や実施の在り方については今後も検討し、改善しながら取り組んでいく必要がある。

○地域との連携

コロナウイルス感染症が拡大した数年前から地域関係者と直接関わりをもった活動がほとんどできていない。昨年度、地域で実施された防災フェアにPTAと共に参加したが、まだまだ十分な連携がなされているとは言い難い状況である。

(2) 具体的な取組

ア 防災教育

○避難訓練

本校では、学期に1回、避難訓練を実施している。2学期実施の地震火災避難訓練後には、児童生徒が実際に避難シューターを体験するだけでなく、業者立会のもと、避難シューターの具体的な設置手順を教職員も学び合い、情報を共有した。

3学期実施の地震避難訓練後には、南海トラフ巨大地震発生後、救援・支援の基幹となる地元の陸上自衛隊に盲学校の存在を知ってもらう目的で、陸上自衛隊に外部講師を依頼し、児童生徒との交流を図ることとしている。具体的には、自衛隊の車両やバイクなどの見学、自衛隊の活動についての講話を予定している。

このように、訓練を学校単独の定例化した行事として終わらせるのではなく、視覚障害者への理解・啓発や支援のあり方について外部機関と連携し取り組んだ。また、9月から毎月1回シェイクアウト訓練およびJアラートに対する訓練を実施している。

避難シューター



避難シューター体験をする児童生徒の様子



○外部機関との連携

外部機関との連携においても、特定の業態・領域に偏ることなく、多方面の機関と連携し、防災教育が教科横断的な視点で学べるよう工夫した。例えば、高知城歴史博物館の学芸員や、NHK 高知放送局のアナウンサーを講師に迎え、高知県の災害の歴史や地震のメカニズムの学習、災害時の呼び掛け文を考えるなど、教科による学びを生かし、学部を超えて児童生徒たちが学びあい、伝えあうことで、主体的・対話的で深い学びにつなげられるきっかけづくりとした。

災害伝承碑のミニチュアを
触察する児童



高知の災害の歴史についての講話
(講師：高知城歴史博物館学芸員)



災害時の呼びかけについての講話・
グループ活動 (講師：NHK 高知放送
局アナウンサー)



○保護者・地域との連携

保護者や地域との連携を強化するために「防災デイキャンプ」を実施し、児童生徒とともに学びを共有する場を設定した。保護者や地域住民等へも案内したところ、数名の保護者が参加した。

災害についての講話や、起震車体験ブース、煙脱出体験ブース、割れガラス体験・防災グッズの展示ブース、地震についての実験ブースを半日かけて体験した。

起震車を体験する生徒と教職員



煙脱出体験をする生徒と教職員



割れガラスに見立てたものの上を歩く児童



○寄宿舎での取組

本校では寄宿舎を設置しているということもあり、災害時の「弱み」でもある教職員が激減する夜間の災害を想定し、寄宿舎による「防災キャンプ」も実施した。

危機管理マニュアルでは、寄宿舎生が寄宿舎から学校へ2次避難することとしている。防災キャンプでは、実際に児童生徒、教職員が対応できるかという検証も兼ね、防災食（救給カレーや救給コーンスープ、救給ゴロゴロ野菜の煮物）を湯煎して、夕食として食べたり、2次避難場所の一室で一泊したりした。

生徒と教職員が夜間避難する様子



生徒が非常食を食べる様子



生徒がアルミシート等を使用して休んでいる様子



イ 安全管理

○防災研修会

南海トラフ巨大地震について教職員を中心に、関係者一同が自分事として捉え、学校での防災対策を一致団結して行っていくことを目的として、県外より佐藤敏郎氏を招聘し、東日本大震災当時の話を聞く研修会を実施した（台風接近により急遽オンライン開催に変更）。

（参加校および参加施設等：山田特別支援学校、高知若草特別支援学校、高知江の口特別支援学校、山口県立下関南総合支援学校、鹿児島県立鹿児島盲学校、本校児童が利用しているデイサービス関係者、本校近隣のデイサービス関係者、地域包括支援センター関係者、近隣の福祉事業所関係者、本校保護者）

保護者や地域、県内の学校に配布した防災研修会のチラシの一部

令和6年度 高知県立盲学校 防災研修会
～一緒に学びませんか？～

本校では、令和5年度に引き続き本年度も「高知県立盲学校安全総合支援事業」の拠点校として、子どもたち一人ひとりが自分の命を自分自身で守ることができるような安全に関する資質・能力の育成を目指して、災害安全に重点を置き、安全教育の実践を続けています。
この度、防災研修会を下記の日程で開催いたします。多数のご参加をお待ちしています。

- 日時：令和6年8月27日（火）13:15～15:10
- 会場：高知県立盲学校 1階 食堂（高知市大膳町6-32）
- テーマ：～3.11を学びに変える～
- 講師：一般社団法人 Smart Supply Vision 特別講師 佐藤敏郎氏

○学校安全実践力向上出前講座の活用

令和6年度学校安全総合支援事業（文部科学省実施）のひとつである「学校安全実践力向上出前講座」を活用し、県外より諏訪清二氏を招聘し、学校再開計画で連携を約束している近隣の特別支援学校の学校安全担当者や教育委員会の方々と共に「学校再開」をテーマに講話およびグループ協議を行った。

昨年度より学んでいる、発災後の速やかな「学校再開」について重要性は認識できているものの、具体的な手立てについて教職員間でもイメージが難しく課題も多い。一部の教職員だけで「学校再開」は難しく、課題解決に向け、ひとりでも多くの関係者が学び続けることが重要であると考えている。

（参加校：山田特別支援学校、高知若草特別支援学校、高知江の口特別支援学校）

研修会の様子



グループワークの様子



○保護者合同引き渡し訓練

児童生徒にとって、最もかけがえのない家族の命を守るために、昨年度に引き続いて、保護者合同の引き渡し訓練を実施した。

学校で決めている災害時のマニュアルや対応等の共有を行うだけでなく、今年度は、8月に南海トラフ地震臨時情報が出たことを踏まえ、今後、南海トラフ臨時情報に関わる情報が出た場合の対応についての説明も行った。その後、保護者と担当教員等で身近なお菓子をを使った防災食を作って食べるミニワークショップも実施している。

教員と保護者が防災食を作る様子



保護者と教員が生徒引き渡しについて確認する様子



○防災フェアへの出展

非常時に頼りとなる地域の力を維持・発展していくために、PTAと連携し、近隣の中学校を会場として行われた防災フェアに出展し、視覚障害者における災害時の支援方法等の理解啓発ポスターの配布や、手引き体験、盲導犬との触れあい体験、本校理療科教員および生徒が施術するマッサージ体験のブースを設けた。日ごろから顔の見える存在として視覚障害の理解啓発を行った。

体育館内の盲学校ブースの様子



屋外の盲導犬触れ合いブースの様子



(3) 取組における成果と課題

<成果>

○防災学習

高知城歴史博物館の学芸員や NHK 高知放送局のアナウンサー、自衛隊、防災設備会社、防災グッズを取り扱うホームセンターの担当者、消防署など、今年度の防災学習では、多くの関係機関と連携しながら、体験的な活動を中心とした防災学習を実施することができた。児童生徒の多くは、これまでの学習により、防災についての知識がある程度積み重なってきている。しかし、より自分事として防災について考えるために、起震車で震度 7 程度の揺れを経験したり、地震の実験装置を使って揺れ方を学習したりするなどの体験的な学習がより良い機会となったと考えられる。

また、教職員においても、体験的な学習を通して、重度重複障害がある児童生徒の身を守るためにどのような姿勢が適切なのか考えたり、どのような声かけをすれば児童生徒が少しでも落ち着いて行動できるのか考えたりすることができ、多くの気づきや学びのある防災学習となった。

○実際の災害を想定した避難訓練

昨年度から引き続き、実際の災害を想定し、周知なしのシェイクアウト訓練を実施している。今年度のシェイクアウト訓練は、学校のいかなる場所、いかなる時間に災害が発生しても、児童生徒が自分の命を守る行動をとることができる力を身につけるために、朝の登校直後の時間や、児童生徒によってはひとりで過ごしている場合もある休み時間、授業中など、毎月違う曜日、違う時間を設定して実施した。

また、Jアラートの訓練も取り入れた。Jアラートの警告音を初めて聞いた児童生徒もあり、今後の防災学習で学習を深めるべき内容を確認することができた。

○メディアを活用した防災についての取組の発信

防災研修会や防災デイキャンプ、高知城歴史博物館との連携学習など、県内唯一の視覚支援学校である本校での防災についての取組を、県民の多くの方々に知っていただくために、メディアに取材依頼をし、防災デイキャンプでは、高知新聞と読売新聞に取り上げていただいた。

また、全 2 回実施した高知城歴史博物館との連携学習では、災害伝承碑の触察、津波のメカニズムを知る実験などの学習では高知新聞、災害時の呼びかけ文について考える学習では NHK の番組にそれぞれ取り上げていただき、本校の取組について発信することができた。

昨年度からの取組をまとめ応募した「令和 6 年度 1.17 防災未来賞 ぼうさい甲子園 2024」では、特別支援学校・団体部門で奨励賞を受賞し、今後、「ぼうさい甲子園」の特設サイトにて、活動の様子を紹介していただける予定である。

＜課題＞

○防災学習の更なる充実

個別の教育支援計画を有効に活用し、地域の特性や児童生徒の実態に合わせた取組を行っていく必要がある。特に、本校の児童生徒は登下校の方法が様々（単独登下校、保護者送迎、デイサービスや介護タクシーでの送迎など）であるが、登下校時を想定した避難訓練の実施が不十分である。今年度全校児童生徒が一斉に実施した避難訓練や防災デイキャンプなどとは違う、児童生徒の登下校方法に合った訓練を実施する必要があるが、実施の時期や保護者など関係者との調整が必要になることなど、実施までに検討が必要である。

○地域や関係機関との連携

視覚障害についての理解啓発を含め、防災について一緒に考える機会（避難訓練や避難所開設訓練、炊き出し訓練など）を本校が主催して実施することはできなかった。視覚障害についての理解啓発の部分は、地域の防災フェアへの参加を行っているが、「防災」に特化して考える機会についても設定し、連携強化を図りたい。

また、福祉避難所としての備えが十分であるとは言い難い状況のため、要支援者の情報や必要物品について主管している市役所等とも連携して備えを進めていきたい。

○家庭との連携

防災研修会や防災デイキャンプなど、防災について共に学んだり体験したりできる機会を設定し、保護者への案内も行ったが、平日開催ということもあり保護者の参加が少数であった。また、休日に災害用伝言ダイヤルの体験訓練や「すぐーる」を活用した安否情報回答の訓練を実施したが、「すぐーる」回答訓練では24時間以内に回答のあった家庭が6割程度と緊急時における連絡体制に課題が残る結果となっている。

防災についての研修会やイベントを休日に開催することや、学校行事の日に行っている引き渡し訓練のタイミングで「すぐーる」回答訓練を実施することなど、家庭が参加しやすい機会を工夫して設定していく必要がある。

（４）今後の取組

【組織として学び続けるために】

- ・児童生徒および教職員が知識を基盤として行動できるよう、外部機関とも連携しながら、体験的学習を踏まえた防災学習や避難訓練（シェイクアウト訓練も含む）を実施する。また、今年度実施した寄宿舎生が学校で1泊宿泊する防災キャンプを、寄宿舎生以外の児童生徒にも体験させることができるよう計画をしていく。
- ・災害時に大切である地域とのつながりを深めるため、避難所開設訓練、視覚障害の理解啓発を含めた防災フェアを計画し、地域とともに防災についての備えを取り組んでいく。また、防災についての研修会やイベント、避難訓練などを公開し、日頃から連携をはかることのできる機会を設定する。
- ・危機管理マニュアルや学校再開計画の見直し、改善を図っていくとともに、危機管理マニュアルについての内容を周知する場を設定し、危機管理マニュアルに基づいた訓練を実施する。また、学校再開計画で、連携を約束している近隣の特別支援学校同士で、計画の内容について協議する機会を設定する。
- ・これまでは一般的な災害への備えについて学ぶ機会を多く設定してきたが、今後は視覚障害に特化した防災への備えを学ぶ機会（防災学習や避難訓練など）を設定する。